

# 感情用語（形容詞・動詞）の

## 語尾変化にともなう小学生の感情発達

下鳥照子

感情は、我々の日常生活において、それが意識されるか否かにかかわらず、あらゆる精神活動の核となっている。また感情は、生きた人間の精神活動であるから、常に流動し、変化している。私は、そういった人間の感情変化を、発達的に研究することを試みた。特に小学生に焦点を定め、そこにおける感情発達の過程を見ようとしたのである。しかし、感情は内面的な心理作用であるため、何らかの形で外面に表出されたものを媒介としなければ、その発達を見ることも不可能である。そこで、感情表出には欠くことのできない一つである「ことば」を媒介とし、小学生が感情表現を示すことばにどう反応するか調査し、考察することによって、小学生の感情発達を探る一つの手懸を得ることを研究の目的とした。

### 研究過程

ことは、人間の感覚・感情と音声との接点に位置するものであるからこそ、人間の感情の陰影を表わすことができるのである。従って、ことばは人間の感覚・感情を呼びさす音の並びだと言うことができる。しかし、人間の感覚・感情と音声との接点は、無限にあるとは言えない。我々は、「ぬけぬけ」という音声に、

面の皮が厚い者に対する腹立たしさを感じるが、「ぬけぬけ」という音声には何も感じない。このように人間の感覚・感情を呼びさす音の並びは有限であり、我々はその有限であるところの音の並びを組み合わせることによって感覚・感情用語を構成しているのである。

たとえば「あこがれ」の語構成は、「ア」「コガレ」「ア」「粉枯」(「ア」「コ」「ガレ」)、「ア」「離」である。それぞれの語源を調べると、「ア」「離」である。それらの語源を調べると、「ア」「接頭」自然の声。漢語、朝鮮語及南方語に於ても用いられる。発声を助けるために接頭せられるので、一定の語義はないが、之によって多少意義を改し、或は用途を局限することがある。「ア」「コガレ」(粉枯)「下活」(「ア」「カレ」)の転呼——次の例の如く古典には、下コガレ(粉枯は借字)と用いた例があるのみであるが、之にアを接頭したアコガレ(アコガレ)が浮岩、憧憬の意に用いられる所を見ると、魂が其居處を離れるという意味で戀慕の義に転じたのであろう。」とある。「アコガレ」が言いあてている感情は、魂そのものを感じることにによって固定される感情であるし、その語構成は感情が起る時の「人間の状態の把握」に応じる音の組み合わせだと言

えよう。そこで、感情用語を、その語構成すなわち「人間の感覚・感情を呼びさす音の並びの組み立てられ方」で分類することにより、我々の感情を分類することを試みた。

まず第一に、国立国語研究所発行の分類語彙表の中から、感情用語と判断できる八百四十語を抜き出し、それらを語構成(ことばを語幹と語尾とに分け、特に語尾にどの音が選ばれているか)で分類した。そこで気付いたのは、語尾に選ばれる音によって、その感情用語が、名詞的、形容詞的、動詞的のいずれにあたるかが決まり、語幹によっては、複数の語尾を選んで、動詞的にも形容詞的にもなるものがあるという点である。それは、我々の感覚・感情の結晶の仕方には様々なパターンがあり、感情用語の語尾変化が、そのパターンを言いあてていることを意味する。この点を明らかにするため、数多くの感情用語の中から、「語幹＋活用語尾」という語構成を持つ形容詞及び動詞に絞った。そして、それぞれの語の、語幹と活用語尾との関係から語幹・語尾結合のパターンを見つけることにより、日本人の感情を、その結晶の仕方で分類することにしたのである。

そのために次に上げる円盤を作成した。これは、語

表 1

☐ テスト1で選択したことは

☐ テスト2で選択したことは

[illegible]

幹を円の中心に設定し、外円に活用語尾を並べたものである。円盤では活用語尾を、形容詞活用語尾と動詞活用語尾との二つに大別し、それに接尾語「がる」と「かす」とを加えた三本立てになっている。形容詞活用語尾は、終止形」を、動詞活用語尾は「終止形」と「連用形」を取り上げ、動詞活用語尾は、活用の種類で色分けをした。

こうして作成した円盤の中心に感情用語の語幹を一つ一つ置き、それが語尾として選ぶものを矢印で結んだ。(表Ⅱ参照)そして、百六十二個の語幹を、その矢印の出力で分類し、さらに語幹が持つ矢印の数と動詞活用語尾の音とで整理したのが表Ⅰである。その中から一つのパターンを取り上げてみよう。

語幹が、動詞活用語尾「む」と形容詞活用語尾「ましい」を選ぶ「A-2-10型」には、「のぞむ・のぞましい」「なずむ・なずましい」「そねむ・そねましい」「ほえむ・ほえましい」「ねたむ・ねたましい」「なやむ・なやましい」「うらやむ・うらやましい」がある。それぞれの語構成を調べてみると、「のぞむ」―「眠為見の転呼、転義」、「なずむ」―「ナ(竝)ツ(著)ミ(活用語尾)、ミ(見)は主観を表示する。」「そねむ」―「背睨」、「ほえむ」―「ほほ観ミ(見)」、「ねたむ」―「ネ(希望表示)タ(接尾)ミ(見)」、「なやむ」―「ナ(長)ヤミ(病)」、「うらやむ」―「ウラ(衷心)ヤミ(疾)」、とある。「うらやむ」と「なやむ」はどちらも、「病」で共通の語構成であるし、その他の語は、「見」で共通の語構成だということがわかる。そしてまた、「のぞましい」「ほえましい」「ねたましい」「なずましい」「そねましい」は、どれも、自己が対象とするものを、見て取った時に生じる感情作用である点で共

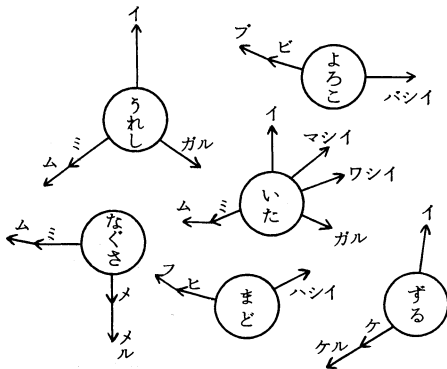
通している。要するに、表Ⅰで整理したのは、日本人の感覚・感情の結晶の仕方のパターンだと言える。

次に、語幹と語尾との関係を把握するため、以下に述べる考察を試みた。

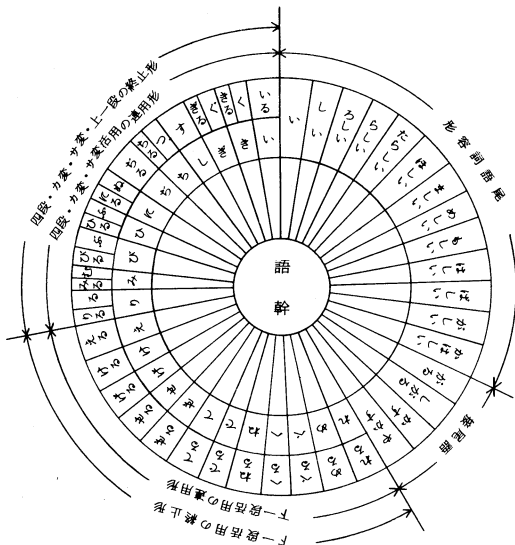
感情表現を示す、形容詞及び動詞には、一つの語幹でいくつもの語尾を持つものがある。その場合、語尾が変化すると、それに即応する感情作用がどのように変化するのか、語幹「いた」を例に取って考察してみよう。語幹「いた」は、形容詞活用語尾「い」「ましい」「わしい」、動詞活用語尾「む」、接辞「がる」と、全部で五通りの語尾と結合する。

形容詞活用語尾「い」及び動詞活用語尾「む」と結合した「いたい」「いたむ」は、身体感覚器官に、直接、刺激が加えられた時、「刺激」に対する「反応」として発する音声である。正常人の身体器官には、机

表Ⅱ



円盤



の角に頭をぶつければ、ぶつけたと同時に「イタイッ」と叫ぶ、反射の働きが作られている。そういう時、「オタイッ」「アタイッ」などと叫ぶ人はいないし、もしいたとしても、誰も彼を正常人とは思わないだろう。このように「いたい」「いたーむ」は、日本人の感覚とそれに即応する音声との関係によって決められた語構成なのである。さらに、「いたい」「いたむ」は、しばしば「身体感覚器官に直接与えられた刺激に対する反応」としてではなしに、発せられることがある。「耳がいたい」「片腹いたい」などがそれで、こういう場合の「いたい」は明らかに感情作用を示していると言える。

形容詞活用語尾「ましい」「わしい」と結合した「いたましい」「いたわしい」は、「身体感覚器官に直接与えられた刺激に対する反応」を基礎とする点で

「いたい」「いたむ」と共通しているが、感情作用を起こす対象、及びその対象者において違いがある。「いたましい姿」という時、「いたみ」を直接に加えられるのは他者で、自己は、他者へ感情移入したため、他者を媒介として「いたみ」を感じているのである。また接辞「がる」と結合した「いたがる」の場合も、「いたみ」を直接に加えられるのは他者である。自己には、「他者がいたみを感じている」ことを見て取ることによってしか感じられない。しかし、この場合は、「いたましい」「いたわしい」の時と違って、「他者への感情移入は行なわれていない。あくまで「他者がいたみを感じている」現象を見て取っているにすぎないのである。

以上の考察から明らかになったように、語幹「いた」は、語尾変化に従い、感情作用を起す対象と、その対象者を設定する。従って、その感情作用の対象と対象者との関係を「感情作用の向き」と呼ぶことにして語幹と語尾との関係をまとめると、「感情表現を示す形容詞及び動詞の語尾変化は、語幹に応じる感情作用の向きを決定し、その語尾変化は、語幹の語構成によって、語尾に選ばれる語を決定する。」となる。従って、語幹「いた」が語尾「い」「む」「ましい」「わしい」「がる」を選んでいることは、この五つの向きに、感情作用を伴わせているといえる。

さらに、語幹「いた」以外のものについても検討した上、語幹と語尾との結合を、それに即応する感情作用の向きで整理すると、次に示す六つのパターンができる。

1. 動詞活用語尾と結合して、自己の感情作用を示すもの。(「いたむ」「よろこぶ」)
2. 形容詞活用語尾と結合して、自己の感情作用を示す

もの。(「いたい」「はずかしい」)

3. 動詞活用語尾と結合して、他者の感情作用に働きかけることを示すもの。(「はずかしめる」「いやしめる」)
4. 接辞「かす」と結合して、他者の感情作用に働きかけることを示すもの。(「おどろかす」「あまやかす」)

5. 形容詞活用語尾と結合して、他者の感情作用に、自己が感情移入したことを示すもの。(「よろこばしい」「なげかわしい」)
6. 接辞「がる」と結合して、他者の感情作用を、自己が見て取ることを示すもの。(「はずかしがる」「いたがる」)

語幹の語構成によって、語尾に選ばれる語が決定された時、それに即応する感情作用の向きも決定されるのであるから、一つの語幹に、いくつもの語が語尾として選ばれる場合は、その語幹に即応する感情を共有し、違う向きに作用する感情が、いくつか出来るわけである。それらの感情作用の向きをまとめて、「語幹に応じる感情作用の広がり」と名付けた。そこで、語幹に応じ、語尾として選ばれる語を、どう取るかによって日本人の感情作用の即応があるのだから、語幹、語尾結合、及びその変化に応じること、感情の広がりや発達を見ようとしたのである。

### 調査事例の概説

○テストについて

第三に、これまでの分類及び考察から得た、「感情表現を示す形容詞及び動詞における語尾変化のパターン」に、小学生がどう応じるかを見るためのテストを作成した。テストの目的は、感情表現を示すことばの

語彙力を見ることではなく、どう応じるかを見ることにある、という理由から、次に示す発問形式を取った。語の選択にあたっては、前に作成した表Ⅰを使用し、テストⅠでは、語幹が二つ以上の語尾をとるパターン(ABCDEFGHIINO)を、テストⅡでは、円盤の外円に並べられた語尾すべてから、各パターン一つずつを取り上げた。

○調査対象

学年	学校名		合計(名)
	町田三小	横浜大正小	
二年	四十一	三十九	八十
三年	四十一	四十一	八十二
四年	三十七	三十八	七十五
五年	四十四	三十八	八十二
六年	三十五	四十二	七十七

ただし一年生は、質問の意味を理解しがたいという判断から除いた。

○実施年月日

昭和五十年十月七日～十四日

### 結果と考察

考察Ⅰ 学年に伴う発達の仕方が等しい感情作用の特徴について(テストⅠにおける各問いの正解率百分率より)表Ⅲ参照

① 自己の行動を自己の意志で放棄する感情の正解率が低い三年生

自己の欲望を自己の意志で抑圧するといった感情作用である「しのぶ」「あきらめる」と、自己の意志で自己の行動を放棄する感情作用である「ずるける」「なまける」とは、どちらも三年生の正解率が落ち込んでいる。この結果から、他学年にはない三年生の特徴として、自己の行動をコントロールする感情作用に

★ □ の文字に つなかるものを線でむすびなさい。

スタート

ゴール

なまえ	年 男 ・ 女
-----	---------

1 はにか

2 あわれ

3 すこ

4 つよ

5 かく

6 いだ

7 けな

8 あい

9 おど

10 おの

11 どの

12 なけ

13 だろ

14 いそ

15 おこ

16 せと

17 ためら

18 まよ

19 くら

20 しの

21 よろこ

22 わる

23 うた

24 あま

25 なま

26 する

27 あきら

28 けず

29 こが

30 おそ

31 なく

32 うと

33 いせし

①

あやま

く

る

す

②

おもし

る

い

す

が

る

③

かわい

い

ろ

が

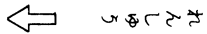
る

し

い

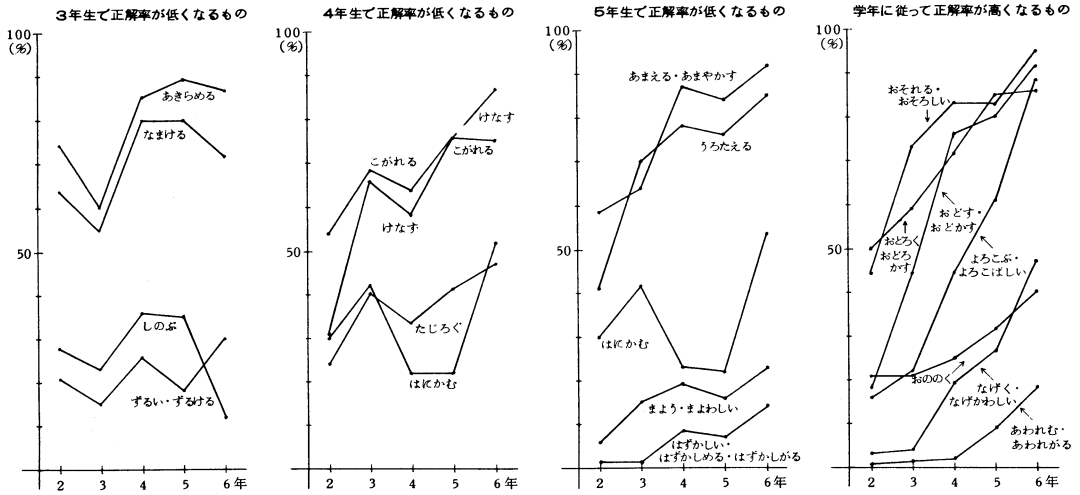
おわり

おしまへ



考察1のグラフ

表 III



片寄りのあるところが上げられるだろう。すなわち、三年生では自己の行動力を他者から抑圧されることがあっても、自己の意志によって抑圧したり、放棄したりすることは少ないところである。確かにこれは、三年生児童の爆発的なエネルギー、積極性、自己主張の強さ、相手にはおかまいなしの勝手な振舞などを考えると、うなずける結果である。

② 四年生及び、五年生で正解率が低い感情について。  
羞恥感情を示す「はにかむ」「はずかしい・はずかしめる・はずかしがる」「あまえる・あまやかす」  
他者への吸引感情を示す「こがれる」、甘えの感情を示す「あまえる・あまやかす」、自己が行動する方向を見失い停滞する感情を示す「たじろぐ」「うろたえる」「まよう・まよわしい」においては、四年生ないし五年生で正解率が落ち込むという結果が得られた。この結果は、四年生、五年生の特徴として考えられるが、なぜこうなったか、又、停滞感情の中でも「たじろぐ」だけが四年生で落ち込み、他のものは五年生で落ち込むのはなぜか、わからない。しかし、羞恥感情、停滞感情、甘えの感情、吸引感情、軽蔑の感情は、どれも彼我関係の上に成立する感情である点で、共通性が認められる。従って、四年、五年の時期には、彼我関係の上に成立する感情に、ある変化が起こるということが言えるだろう。

③ 情動感情は、ほぼ学年に従って発達する。  
恐怖の感情を示す「おののく」「おそれる・おそろしい」、驚異の感情を示す「おどろく・おどかさ」「おどす・おどかさ」、喜びの感情を示す「よろこぶ・よろこばしい」哀しみの感情を示す「あわれむ・あわれがる」「なげく・なげかわしい」は、ほぼ学年に従って正解率が伸びている。これらの感情は、どれも突

然引き起こされた、一時的で急激なもの、すなわち「情動」であるという点で共通している。従って、この結果から、情動感情は、学年に従って発達するといえることができる。

しかし、この結果は「あらゆる感情の基礎であり、身体の生理的作用を伴う情動感情は、二年生時ではほぼ完成しているのではないか」という予想に反するものだった。このように予想と結果のくい違った原因は、情動感情を示すことばに、「おどかさ」「なげかわしい」などのような、他者に対する情動作用が含まれていたためであろう。しかし、語尾変化のパターンが等しい「よろこぶ・よろこばしい」と「なげく・なげかわしい」は、正反対の感情であるように考えられないでもないが、お互いに情動である点で共通し、またその発達過程も共通していることがわかったところは、注目すべき結果である。

考察2 ― 感情作用の広がり、どの向きから発達するかについて ―

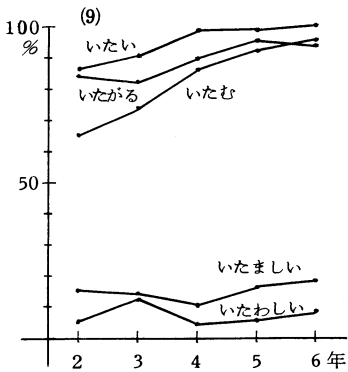
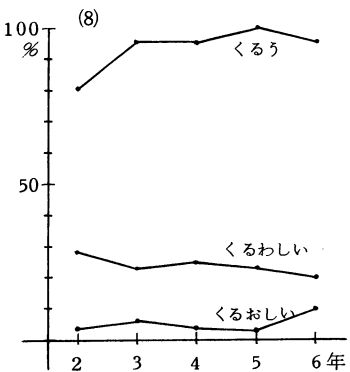
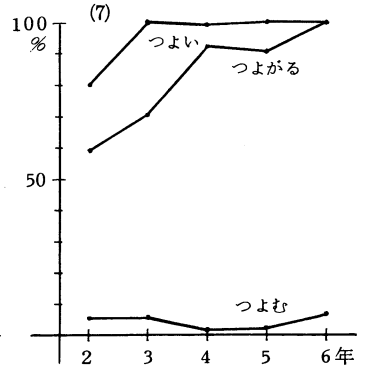
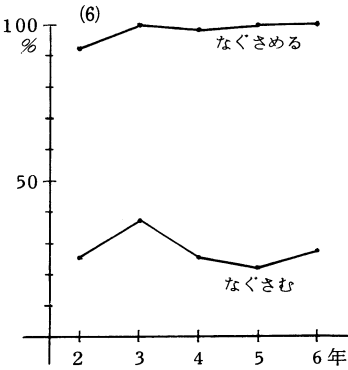
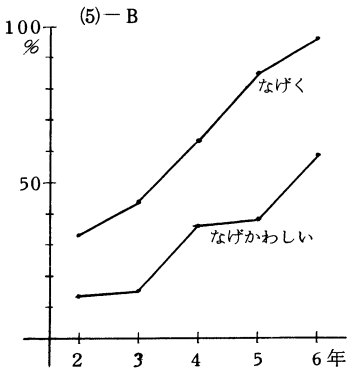
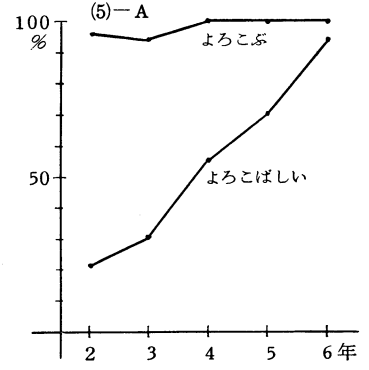
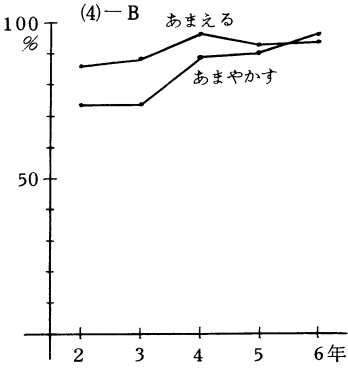
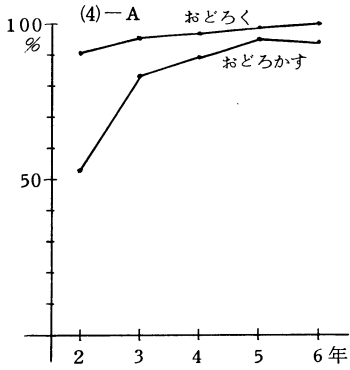
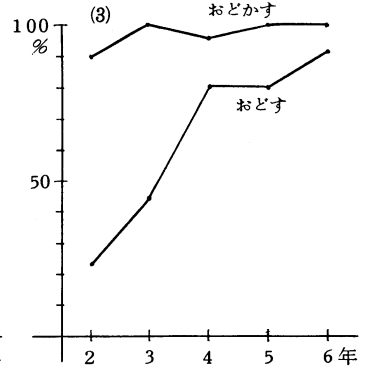
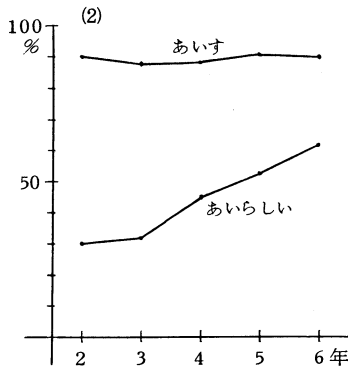
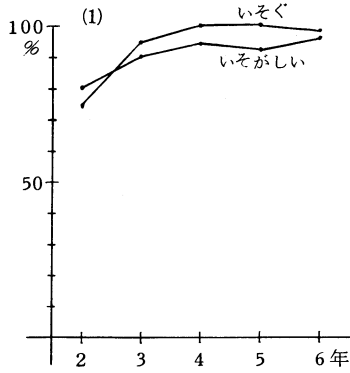
(テスト1における各語幹語尾結合の正解率より) 表IV 参照

(1) 「いそぐ・いそがしい」  
ともに自己の感情作用を示す「いそぐ」と「いそがしい」とは、正解率の伸び方もほぼ一致している。三年生で100%近くの伸びを示すところから判断すると、自己の気分的な感情作用を示す「いそぐ」と「いそがしい」とは、平行して発達し、三年生でほぼ完成すると言える。

(2) 「あいす・あいらしい」  
自己の感情作用を示す「あいす」と他者の感情作用に自己が感情移入したことを示す「あいらしい」とでは、正解率の高さに違いがあり、前者の方が高い。

考察2のグラフ

表 IV





「あいす」の正解率は、三年生で90%に達するが、「あいらしい」のそれは、二年生時の30%から、学年に従って伸び、六年生になっても62%に達するにすぎない。この結果から、「あいらしい」に即応する感情作用は、「あいす」に即応する感情作用がほぼ完成された上で、学年に従い徐々に発達すると言える。

(3) 「おどす・おどかす」

共に、他者の感情作用に働きかけることを示す「おどす」と「おどかす」との正解率は、前者が全学年100%近い伸びを示したのに対し後者は学年に従って伸び六年で92%に達するという結果になった。従って、「おどかす」に即応する感情作用は、二年時にはほぼ完成されるが、「おどす」に即応する感情作用は、三年生から四年生になる過程で急激に発達し、六年生ではほぼ完成されるということが出来る。

「おどす」と「おどかす」とに即応する感情が平行して発達しないのは、動詞活用語尾と結合した「おどす」より、接尾語「かす」と結合した「おどかす」の方が、「他者の感情作用に働きかける」ことに即応しやすいからではないだろうか。また使役を表わす動詞活用語尾「す」（「人をし〜せしむ」）に即応することは、低学年にとってもほとんどできないということも、原因の一つに考えられる。

(4) 「おどろく・おどろかす」

「あまえる・あまやかす」

「おどろく・おどろかす」「あまえる・あまやかす」は、どちらも語尾変化によって、自己の感情作用と、他者の感情作用に働きかけることを示す点で共通している。

前者の「おどろく」と「おどろかす」との正解率を比較すると、二年生時において、その高さに差がある

が、三年生から六年生に至るまでは、ほぼ平行した伸びを示している。また、後者の「あまえる」と、「あまやかす」との正解率を比較しても同様である。従って「おどろく」と「おどろかす」、「あまえる」と「あまやかす」においては、自己の感情作用と、他者へ働きかける感情作用とがほぼ平行して発達すると言うことができる。

この結果から、甘えの感情発達は、「あまやかす」と「あまえる」との彼我関係上に成立すると考えられるだろう。そうだとすれば、「あまえる」と「あまやかす」との正解率が高いことから考えても、甘えに関する彼我関係は早くから育っているということが出来る。この点には注目すべきであろう。

(5) 「よろこぶ・よろこばしい」

「なげく・なげかわしい」

「よろこぶ」と「よろこばしい」、「なげく」と「なげかわしい」とは、どちらも、語尾変化によって、自己の感情作用と、他者の感情作用に自己の感情を移入したことを示す。

「なげく」と「なげかわしい」との正解率を比較すると、全学年を通して「なげく」の方が高い伸びを示すが、どちらも学年に従って徐々に伸びる点で共通している。従って、「なげく」と「なげかわしい」とに即応する情動的感情作用は、自己の情動作用と、他者に感情移入するものとが、ほぼ平行して発達すると言うことができる。しかし、後者の発達は前者より遅れている。

「よろこぶ」と「よろこばしい」との正解率を比較すると、「よろこぶ」の方は、二年生で90%台に達し、全学年90%以上の伸びを示すが、「よろこばしい」の方は、二年生時の21%から学年に従って伸び六年生で

94%に達する。従って、「よろこぶ」に即応する感情は、二年生ではほぼ完成され、「よろこばしい」に即応する感情は学年に従って発達し、六年生ではほぼ完成されるということが出来る。このことから、自己の情動感情の発達が、他者に感情移入するものの発達より早いことがわかる。

また、「よろこばしい」と「なげかわしい」とでは、学年に従って徐々に発達する点で共通性が認められるが、「よろこばしい」に即応する感情作用の方が、「なげかわしい」に即応する感情作用より早く発達するという相違点もある。

(6) 「なぐさむ・なぐさめる」

どちらも他者の感情作用に働きかけることを示す「なぐさむ」と「なぐさめる」だが、その正解率には違いが見られた。「なぐさめる」の正解率は、二年生で93%を示し、全学年100%近い伸びを示すが、「なぐさむ」の正解率は、四年生以上でどれも20%台に留まるという伸びを示している。「なぐさむ」の正解率がこのような結果になったのは、「なぐさむ」に即応する感情作用に、自己の感情作用を示すこと、他者の感情作用に働きかけること、という二つの向きがあるからではないだろうか。

(7) 「つよい・つよむ・つよがる」

「つよい」と「つよむ」はどちらも自己の感情作用を示し、「つよがる」は他者の感情作用を見てとることを示す。

これらの正解率を比較すると、「つよい」では、全学年を通して90%以上の伸びを示し、「つよがる」では、二年生で59%を示し、学年に従って伸び、四年生以上はどの学年も90%台に達している。ところが「つよむ」では、全学年10%以下の極く低い伸びを示して

いる。従って、「つよい」に即応する感情作用は二年生で、「つよがる」に即応する感情作用は四年生ではほぼ完成するが、「つよむ」に即応する感情は、小学生でははっきりした発達が見られないと言える。

「つよむ」に応じる感情作用は、単なる自己の感情作用でなく、「自己が他者を意識して、自己の感情表出を行なう」というものである。動詞活用語尾と結合して「つよむ」と同じような感情作用を示すものに、「すごむ」「わるびる」などがある。これらの正解率を調べると、やはりどの学年も極く低い正解率を示していることがわかった。従って、「つよい」「つよむ」「つよがる」に即応する感情作用は、「つよい」から「つよがる」へ、「つよがる」から「つよむ」へという順で発達するといえる。

以上の考察から明らかになった、「つよい」「つよがる」「つよむ」に即応する感情作用の発達の違いから、その発達過程をまとめると、「第一に、自己の感情作用が完成され、第二に、他者の感情作用を見てとることが完成され、その両者が完成された上で、第三に、他者を意識して、意図的に自己の感情表出を行なうことができる。」となるだろう。

#### (8) 「くるう・くるおしい・くるわしい」

「くるう」は自己の感情作用を示し、「くるおしい」「くるわしい」は他者の感情作用に自己の感情を移入することを示す。

「くるう」の正解率は二年生で81%を示し、三年生以上ではどの学年も100%近くの伸びを示す。「くるおしい」では全学年を通して10%以下の低い伸びを示し、「くるわしい」では、全学年を通して20%台の伸びを示している。従って「くるう」に即応する感情作用は、三年生時にはほぼ完成されるが、「くるおしい」「くる

わしい」に即応する感情作用は、あるレベルで発達が滞っているといえる。

他者の感情作用に自己の感情を移入することを示す「くるおしい」「くるわしい」に即応するには、まず「くるう」に即応する自己の感情作用が完成され、かつ、他者の感情作用を見てとれなければならない。「くるう」に即応する感情作用に関しては、自己の感情作用として動く場合、小学生でも可能であるが、それを他者に感情移入することとなると困難なようである。

#### (9) 「いたい・いたむ・いたがる・いたましい・いたわしい」

「いたい」と「いたむ」は自己の感情作用を示し、「いたましい」と「いたわしい」は他者に、自己の感情を移入することを示す。また、「いたがる」は、他者の感情を見てとることを示す。各正解率を比較すると、「いたむ」「いたい」「いたがる」は、どれも学年に従って伸び、五年生ではほぼ完成される。「いたましい」「いたわしい」の正解率は、どちらも全学年を通して20%以下という伸びを示し、学年に伴う発達は見られない。従って、「いたむ」「いたい」「いたがる」に即応する感情作用はほぼ平行して、学年に伴い徐々に発達し、五年生で完成するが、「いたましい」「いたわしい」に即応する感情作用は、六年生までに大きな発達が見られないと言える。

考察3 — 古語めいた音を持つ感情用語において見られた発達の特徴について —

(テスト1及びテスト2における各語幹語尾結合の正解率より) 表V参照

「いきどおらしい」と「おそろしい」とは同音の語尾を持つが、それぞれの語幹と結合したとき、後者が日常的な語になるのに対し、前者は古語めいた語にな

考察3のグラフ

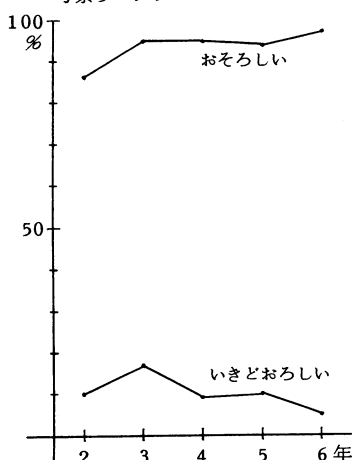
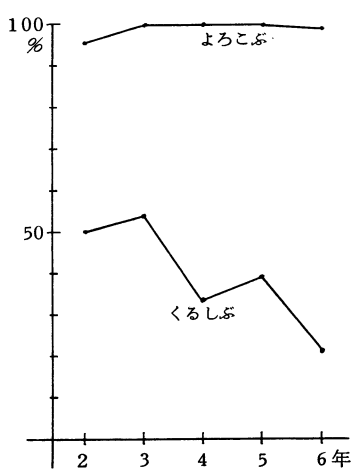
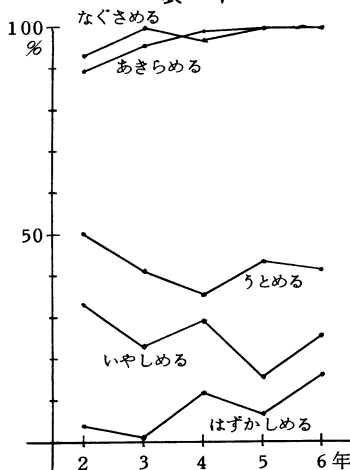


表 V



る。このようなことは、「うとめる」「いやしめる」「はづかしめる」と、「なぐさめる」「あきらめる」との間に於いても、また「くるぶし」と、「よろこぶ」との間に於いても同様である。

古語めいた音を持つ感情用語「いきどおろしい」「くるしぶ」「うとめる」「いやしめる」「はづかしめる」の正解率は、どれも、同じ語尾を持ち日常的話になるものの正解率より低く、50%以下で停滞している。また、高学年になるとかえって低学年よりも低い正解率を示す点も共通している。これは、高学年になって知的処理を行なったための結果とも考えられる。

考察4—感情発達における男女の違ひについて—  
(テスト1及びテスト2における男女別の各語幹語尾結合の正解率より)表Ⅴ参照

男女別の正解率を大まかに見ると、どちらも伸び方はほぼ一致しており、感情発達において、男女の間には大差がないと言える。しかし、いくつかの問に関しては男女の間に違ひが見られ、中には大差があるものもあった。

自己の感情作用を示す問の中では、「なげく」「たじろぐ」「あわれむ」「はにかむ」「おののく」の正解率に、男女の差が見られ、どれも女子の方が高い率を示している。「なげく」のグラフを見ても、女子の正解率は二年生で、男子の正解率の二倍を示している。それが、六年生になると男女共に90%台となり差はなくなる。さらに各学年ごとの正解率を比較すると、「なげく」に即応する感情作用は、男女とも学年に従って発達することに変わりはないが、女子にとっては、早くから即応できる感情であり、男子にとっては、低学年ではほとんど即応できないが、四年生から五年生になる過程で大きく発達する感情作用だと言うこと

ができる。

「たじろぐ」「おののく」「なげく」「はにかむ」「あわれむ」に即応する感情作用において、男女の間になぜこのような差が出来たのかについては、どう考えてよいかわからない。しかし、いずれにしても女子の方が早く発達するという結果には注意したい。

感情作用の対象に、自己の感情を移入したことを示す「あいらしい」「よろこばしい」「まよわしい」における正解率も、男子より女子の方が高いという結果が得られた。

「あいらしい」に即応する感情作用の発達過程において四年生から五年生に見られる男女差は、予想外に大きかった。これは注目すべき結果である。この原因は、「あいらしい」に即応する感情作用が、ある対象に自己の感情を移入することによって生じるものであるためであろう。それにしても、四年生、五年生、六年生における女子の正解率の伸び方は、男子のそれに比べると著しいものである。高学年における女子の身体変化から考えても、このころから女子に、母性的な感情作用に即応しやすい傾向が現れてくると考えられはしないだろうか。

他者の感情作用に動きかけることを示す「いやしむ」「おどろかす」「けなす」「はづかしめる」「いやしめる」においても、男女間に、学年に伴う正解率の違ひが見られる。従って、これらに即応する感情作用に関して男子と女子とは、発達の仕方が異なるといえる。

意識的な自己の感情表出を示す「ずるける」にも男女間に発達の違ひが見られた。この感情作用は、全学年を通して正解率が低いのだが、低い中でも男子より女子の方が高い。このことから、「ずるける」に即応

する感情作用は、女子が男子より一足先に発達し始めるということが出来る。

## おわりに

小学生の感情発達を考えるにあたり、感情表現を示す形容詞及び動詞の語構成を媒介として今まで述べてきた。そこで見ることできた、小学生の感情発達は、予想通り複雑であり、とても一言でまとめられるようなものではなかった。しかし、感情作用には、必ず対象者と対象とがあること、また、それらがどう決まるかによって感情作用が異なり、その発達にも違ひがあることが明らかになった点は収穫であったし、それはまた、人間の感情が作用する時は常に自己の構えがあり、それが重要な役割を持っていることもはっきりした。それにしても、感情表現を示す形容詞及び動詞の語尾変化のパターンに、日本人の感情の広がりを見ることは楽しい作業であった。今までなんの気なしに口にしてきたことが、日本人の感情の広がりをもっとに表わしていることを知り、改めて日本語のすばらしさ、楽しさを味わうことができたと同時に、日本語を大切にすることは、日本人の感情を大切にすることなのだということに考えさせられた。

研究に一段落を見た今、反省すべきことは、テスト作成上の問題点である。テスト作成の段階では、感情表現を示す形容詞及び動詞が語尾変化に伴って、感情作用の対象及び対象者をどう変化させるのかというところが、明らかにされていなかった。そのため考察の際、テストに選ばれたことばだけでは不十分な点を感じられた。この点に関しては、今回の研究をもとに、感情表現を示す形容詞及び動詞の語彙及び分類を再検討した上で、テストの改訂を行いたいと思う。

考察4のグラフ

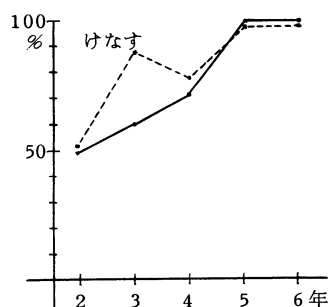
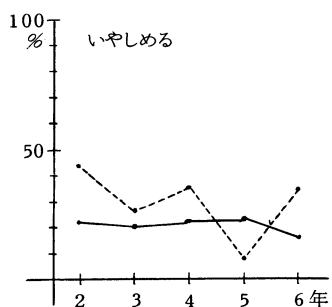
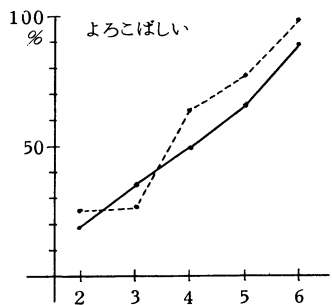
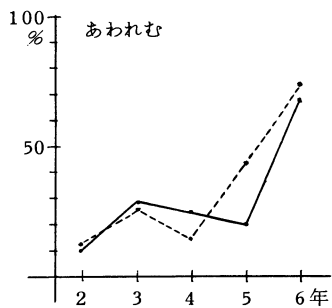
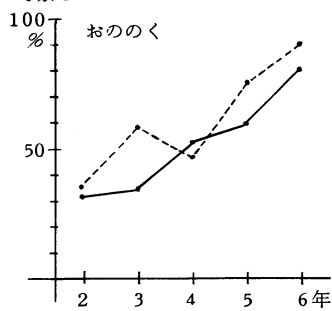


表 VI

